



毎日暑い日が続いていますが、お子様やご家族の方は夏バテなど体調を崩されていませんか？

当院は、新築移転して1年が経ちました。院内の広さや設備は皆様に好評をいただき、スタッフ一同大変うれしく思っております。今後も、皆様にご満足いただけるよう努めて行きたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。



院長のお話

～耳ファイバー（内視鏡）を導入しました～

中耳炎は子供の間では頻度の高い病気の一つです。耳痛や耳鳴りがしてとても不機嫌になります。放置すると、中耳という音の振動を神経に伝える部分が炎症で癒着を起こし、音の伝わりが悪くなり、難聴の原因になりますので、正確に診断をおこない、適切な治療が必要です。感染により浸出液や、膿が多い場合は鼓膜切開をして排液・排膿をしなければなりません。そこまでひどくない場合は抗菌薬等の内服で治療をします。中耳炎を診断するためにはまず、鼓膜を見なければなりません。鼓膜を見るには耳鏡という道具を使いますが、これは見ている本人にしか鼓膜の状態は分かりません。

以前、耳鼻科の先生から、こちらから紹介した患者さんの鼓膜のファイバー写真を見せて頂き、「これはわかりやすい！」と感動しました。そこで実際に使っている先生の所で見学・研修をさせて頂き、7月から当院でも診療に導入いたしました。

普段見ることのできない子供の耳の中の様子がよく分かります。中耳炎の有無はもちろんですが、耳アカの状態もよく分かります。テレビ画像として出てきますので、診療の際は是非一緒にのぞいて下さい。

耳鼻科と小児科の

吸入・吸引について

大人であれば咳をして痰を出したり、鼻をかんで鼻汁を出すことができますが、小さいお子さまはなかなかできません。鼻汁や痰をそのままにしておくと、さまざまな病気をひきおこします。中でも一番重要なのは、痰がたまった状態で感染をおこすと肺炎をひきおこしてしまうことです。

その為、当院では自分で鼻をかんだり痰を出したりできない小さいお子様には、吸入の他に「吸引療法」を実施しております。鼻汁も取りますが、咳をうながして痰を出し、吸引をします。

耳鼻科でもよく、吸入・吸引をされていますが、鼻炎のための治療で、肺の方、痰を出すような吸引を実施されているところはあまりないようです。

実際、耳鼻科の診療で、胸に聴診器をあてて診察をされた経験はないのではないのでしょうか。

耳鼻科での吸入・吸引は鼻炎の治療と考えていただき、咳が出たりゴロゴロするような痰がたまった状態の場合は、肺炎の予防、早期発見のために耳鼻科だけではなく、小児科へも受診をしましょう。

(吸入・吸引療法について詳しくはパンフレットをお読み下さい。)

お薬の知識

☆抗生剤について☆

かぜ、肺炎、麻疹などのさまざまな感染症がありますが、感染症は体の中に細菌やウイルス、クラミジアなどの病原体（病原微生物）が侵入し、それが増えることにより、熱が出る、咳が出る、発疹が出るなどのいろいろな症状がでてきます。この細菌やクラミジアを殺したり、増えるのを防いで感染症を治療する薬が抗生剤です。

感染症には、細菌が起こすものとウイルスが起こすもの、真菌（カビ）が起こすものがありますが抗生剤が効くのは細菌に対してだけで、ウイルスや真菌には効きません。そのため、細菌が起こす特定の病気には素晴らしい効果を上げる一方で病原菌がはっきりしない場合は使い方も難しくなります。例えば、インフルエンザは原因がウイルスですから抗生剤は効きませんが、それでも処方される場合があります。それはウイルスの感染で体の防御が弱まると、もともと喉にすみついてきた細菌が繁殖して、肺炎や気管支炎などを起こすことが心配されるからです。

また、かぜの場合はウイルスによるものも細菌によるものもあり、必要により医師の判断で処方します。医師は様々な症状を診て総合的によりよい選択をし処方をしています。

～抗生剤の副作用～

抗生剤の副作用で多いのは下痢です。抗生剤を飲むと下痢を起こしやすいのは正常な時に雑菌が増えるのを抑えたり腸の吸収を助けている良い働きをしている腸内細菌を抗生剤が殺してしまうためです。この場合は、整腸剤を出してもらったり、ヨーグルトを与えてあげると良いです。

また、抗生剤は強い薬で副作用が強いと思われる方も中にはいらっしゃるかもしれませんが、強い薬というのは、細菌などに対して強い効きめがあるということであって、人間の体に対して強い作用があるわけではありません。人間の体の細胞を攻撃することはないので安心して下さい。

